
Absolute Zero 2nd

DoubleS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Absolute Zero 2nd

【Nコード】

N4900Z

【作者名】

Doubles

【あらすじ】

冬休み前に降りかかっていた問題をなんとか解決して、三条霧矢は家に帰ってきた。しかし、またしても問題が起こる。魔族がらみのトラブルにまた巻き込まれた霧矢のクリスマスはどうなるのか？

帰ってみれば怒る腐女子あり（前書き）

この小説は Absolute Zero の続編です。未読の方はまず先に前作を読まれることをお勧めします。

帰ってみれば怒る腐女子あり

十二月二十二日 土曜日 晴れ時々雪

「きいりいやああああ……」

「さあんじいよおお……」

昼ごろに家に帰った三条霧矢は二人の友人に詰め寄られていた。

「あたしたちを置いて行くなんでどういうこと！」

二人とも指をバキバキと鳴らしている。霧矢は冷や汗を浮かべながら後ずさりした。

「ちよ、ちよつと、落ち着け……二人とも……」

「うるせえ！ 黙れ！」

「とりあえず死になさい！」

「ぎいやああああ！」

薬局に悲鳴がこだまする。

二人が怒っているのには訳がある。霧矢が二人を置き去りにして物事を解決してしまったからだ。もつとも、この二人も霧矢が誘っても起きようとせず寝落ちしたのだが。

よってたかつて霧矢を袋叩きに行っている二人の名前は、上川晴代、西村龍太という。

「霧矢、焼き殺される前に何か言い残すことは？」

晴代の右手が赤く光る。

上川晴代は本来、何の変哲もない女子高生だったが、魔族という異世界からやってきた存在と契約を交わしたことで、火の属性の術を操ることができるようになった。具体的には手で振れた物体を数千度まで熱することができるというものだ。

ちなみに、西村龍太は特に契約を交わしていないため、何の能力

も持たない。霧矢も同様である。

「ちよっ！ 契約異能はマジでシャレにならないって！」

「黙りなさい。風華ちゃんに会おうと思っていたのに、ここにいないし、雨野先輩も有島先輩もないじゃない……」

こめかみに筋を浮かべながら、晴代は近寄ってくる。彼女の右手では空気が熱せられてゆらめいている。

「霜華！ 何とかしてくれよ！」

霧矢は助けを求めるように、脇に立っている和服を着た少女に懇願する。彼女の名前は北原霜華といい、魔族と人間のハーフである。水の力を操り氷の術が使える、自称半雪女である。

「……まあ、晴代もそこまでにしてあげたら？」

「……霜華ちゃんがそういうのなら……まあ勘弁してあげるわ」

霧矢は息を吐き出した。命を取り留めてほっとしている。

北原霜華は一見、温和な女の子として振る舞っているが、実は冷血無慈悲な存在として魔族の中では恐れられている。殺した魔族は数知れず、その冷酷さから絶対零度 アブソリュート・ゼロ という通り名まで持っている。しかし、そのことを知っているのは、こちらの世界では霧矢と彼女の妹である風華、そして光の魔族のハーフであり、霧矢の先輩で生徒会副会長、有島恵子だけだ。ちなみ彼女が晴代の契約魔族である。

向こうの世界で魔族が際限なく繰り広げる内戦による殺戮に辟易して、霜華はこちらの世界にやってきた。そして少し遅れて妹の風華もやってきた。

ちなみに、風華は偶然、有島の親友である生徒会長、雨野光里と契約した。そして霧矢にはなついていない。といっても、出会ってからまだ半日くらいしか経っていない。

とはいっても、風華は同じく出会ってから半日くらいしか経っていない雨野に対してあり得ないほどなついていて。霜華以上かもしれない。

「ところで三条。結局、護は目覚めたとしてこれからどうするのだ」
固い口調でしゃべる眼鏡の女が一人霜華と一緒に立っていた。
彼女は木村文香といって、霧矢の通う県立浦沼高校の科学部員だ。
晴代の親友で霧矢も中学校の時から彼女とは面識がある。

ただし、人に対して毒を盛ったり、対人兵器を開発したりするのが難点である。

「……どうするって言うてもな……それは会長が決めることだろう」
雨野には護という弟がいて、彼は長い間眠り続けていた。それが
発端で霧矢たちはいろいろと面倒事に巻き込まれていた。つい数時
間前に風華との契約異能で雨野が彼にかかっていた呪いを解いたの
だが、それに際して、晴代と西村の二人を完全にスルーする形にな
ってしまったので、こうして詰め寄られていたというわけである。

「とりあえず、風華に会いたいなら、もうしばらくしたら来い。昼
になったら帰ってくるだろ」

「……きいりいやぁ……」

イライラした視線で晴代は霧矢を凝視している。霧矢は無視し、
エプロンを身に着けた。

「とりあえず、遅れたけど復調園調剤薬局は営業開始。用がないな
ら帰れ」

レジカウンターの椅子に霧矢は腰を下ろした。しかし、晴代は霧
矢に詰め寄ってくる。

「ねえ、あたしへの感謝の気持ちはないわけ？」

「ない」

「あ、そう……」

霧矢が無表情で即答したため、晴代の怒りは沸騰した。再び、右
手が赤く光る。

「霧矢、もう一度だけ聞いわよ。あたしへの感謝の気持ちはないの
？」

霧矢はため息をつく。霧矢としては、ちゃんと誘ったのに眠いと言って断ったのは誰だという思いが強かった。

「焼き殺される前に、逆に聞くぞ。もし僕を焼き殺す気なら、霜華と西村の二人にお前の秘密を全部ばらすぞ。それでもいいのか？特にこの前の日曜日のこととか」

晴代がギクリと動く。二人は何のことやらと首を傾げた。

「……そ、それは……」

このことは学校では霧矢と文香しか知らない。

上川晴代は重度のオタクである。いや、授業中に漫画の男性キャラと男性キャラを組み合わせる妄想を繰り広げるほどである。詳しくは霧矢としても説明したくない。

「用がないなら帰れ。風華が帰ってきたら連絡するから」

客向けのおまけのポケットティッシュを投げつけると、霧矢は新聞を広げた。晴代は震えている。

「霧矢のバカアアア！」

涙ぐみながら、晴代は乱暴に店の戸を引くと駆け出して行った。

霜華は啞然として銀色の道を走り去る晴代を見ていた。

「なあ、三条。上川の秘密って何なんだ？」

「それは聞かないであげてくれと、親友として頼みたい」

文香が残念そうな表情を浮かべて、西村の問いを遮った。丸眼鏡が太陽の光を反射して、白く光っている。

「で、どうするんだ。お前ら。お前たちは晴代と違って家は遠いから、会長が帰ってくるまでどうやって時間を潰す気だ？それともう帰るのか？」

新聞の一面記事を眺めながら霧矢は問いかける。

「俺はそろそろ帰るぜ。一応一通りの事情は知ってるしな」

リュックを担ぎ、「よいお年を」と言うと西村は店を出て行った。

しかし、文香は残りたいらしい。霧矢も別に構わないので適当に座って待ってもらうことにした。

「霜華、お前、今日は休んでいいぞ。たまには僕がやっておく」
霧矢の言葉に霜華は意外そうな顔をする。

もともと、霜華はこの家の居候なのだが、それではいろいろと不都合なので、薬局の店員としてアルバイトをしている。霧矢としては反対したが、母親にして店長にして薬剤師である理津子の評価は上々であり、町の老人や子供たちの人気もなぜかやたらと高く、薬局の看板娘として定着しつつある。

「いいの？ 霧君一人で？」

「別に土曜日にはそれほど客は来ない。もともと母さんだけでもこなせるくらいだ。この三連休の間はゆっくりしてもいいぞ」

隣の内科・小児科診療所では、平日こそ老人や小さな子供でこつた返しているが、土曜日は数人の成人の患者がいるくらいでそれほど混み合ったりはしない。

もともと、若者の少ない町であり、若者は医者にかかるときは、それなりに賑わっている隣町までドライブがてら行くことが多い。特に土曜日は帰りに大型量販店でゆつくりと買い物もできるのでなおさらだ。距離も十数キロメートルで、車ならそれほど時間はかからない。電車なら二駅、十分ほどで行ける。まあ、その近さがこの商店街をますます寂れさせているのだが。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

ソファーに座りながら、待合客用の備え付けてある雑誌を読んでいる文香に霜華は耳打ちする。文香はうなずくと、脇に置いてあったコートを取った。

「すまんが、出かけさせてもらう。世話になった」

文香は霧矢に頭を下げると、コートを羽織って外に出て行った。霜華もそれに続く。

「おい、どこ行くのか？」

霜華は首を縦に振ると「晴代の家」とだけ答えて、そのまま店か

ら出ていく。

「……相変わらず、薄着で出かけやがって」
霧矢はぼそりとつぶやいた。

霜華は氷使いで、しかも半雪女と自称するだけあって、寒さには
ありえないほど強い。氷点下の中、薄手の着物やブラウス一枚にス
カートで平然としているほどだ。

それはそれで利点なのだが、この寒い中、他人から見たら嫌でも
目立ってしまうという短所もある。

「……まあ、いいか」

霧矢は新聞のページをめくった。

クリスマス前の平穏と不穏 1

「おじゃましま〜す！」

霜華と文香がやってきたのは、喫茶・毘沙門天の裏にある民家だった。

「ああ、霜華ちゃんと文香か。いらっしやい。上がって」

表札には上川と書かれている。そう、晴代の家である。相当昔から建っている霧矢の家とは違って、わりと新しい木造の家だ。

「霜華ちゃんがあたしの家に来るの初めてだよね？」

霜華はうなずく。キョロキョロと家の中を見回すと、やはり霧矢の家とは違って洋風づくりだ。居間は、畳にこたつではなく、フローリングにテーブルだ。

「あたしの部屋は二階だから、付いてきて」

「晴代。きちんと片付けてあるのか？ この前、私が来たときはひどかったのだが」

うつ！ と文香の言葉に晴代は固まる。少し焦ると、晴代は苦し紛れに言葉をひねり出した。

「えっと……十分だけ、リビングで待っていてくれない？」

「やはりそうなのだな。予想はしていたが」

眼鏡越しに突き刺すような視線を向けられ、晴代はうろたえる。

ドタバタと階段を上っていくと、乱暴にドアが閉まる音が聞こえた。

「やれやれ……」

文香は腕組みをしながらため息をついた。いつものことなのだが呆れてしまうのは変わらなかった。これもいつものことだが。

「晴代って片付けられない人なんだね……」

「まあ、それを否定することはできない。昔は片付けを手伝わせるためだけに呼び出されたこともしょっちゅうだったが。今は、少しはましになった」

リビングの方に文香は歩き出す。霜華も続いた。

「ところで、私は昨日のことはよく知らないのだが、結局、リリアンの件はどうなったのだ？」

リビングのソファーに遠慮もなく腰掛けた文香は、霜華にも座るように勧めながら尋ねた。霧矢も文香に対してはあまり説明していなかったようだ。

「えっとね。何とか追い返したよ。霧君がやり過ぎた感じもしたけど」

「三条はいったい何をしたのだ。やり過ぎるとはいえ、相手は魔族だったのだろう？」

文香はポケットから手帳を取り出した。やはりメモ魔は何でも記録したがるらしい。

「魔族じゃなくて、契約主だったみたいだけど……えっとね、霧君が変な煙玉みたいなものを使ったら……トラウマを呼び覚ましちゃったみたいで、パニックを起こして倒れちゃった……」

リリアン・ポーンというのは、霜華と晴代を狙って襲ってきた女のことだ。昔、カルト教団に殺された家族の復讐をしようと、協力者となる魔族や契約主を探していて、もはや自暴自棄になって霜華たちを襲ってきた。

霧矢・霜華・有島の三人で退けたが、運が悪ければ、霜華は彼女と彼女の契約魔族、エドワード・リースを殺さなければならなかった。

「おそらく、その煙玉は私が作った催涙煙幕だ。三条に万が一の時は使えと預けておいたのだ」

「へえ。文香が作ったんだ。でもあれ爆発しちゃったし、何でできたの？」

「爆発？」

文香がキョトンとした表情を浮かべた。あくまで催涙ガスと煙幕の両用を目指したものであって、殺傷用の爆弾を作ったわけではない。

「うん。黒い煙がもうもうと立ち込めたかと思ったら、リリアンが炎の剣を使ったら爆発しちゃった。それで霧君は思いっきり吹っ飛ばされたし」

霜華が首を傾げながら文香に尋ねた。文香は手帳の数ページ前をめくって考える。

「……なるほど。大体つかめた」

「何だったの？」

「おそらく、煙幕に入っていた炭素粉と可燃性ガスの混合気体に、火の剣が引火して発生した粉塵爆発だろう。まさか、相手が煙幕の中で火を使うとは……予想外だった」

手帳に書かれた煙幕の設計図を霜華に見せながら説明する。

「へえ、こつちの世界はそうやって武器を作るんだ」

「まあ、基本的に人間は異能を使えない。だから自然科学に頼るしかない。そうやって兵器も生まれてきたわけだが、殺し合いのために科学が発展してきたというのは嫌な話だ」

「殺し合いか……」

霜華は暗い表情を浮かべる。文香は突然の霜華の悲しみの表情に困惑した。

「どうかしたか？ まあ、粉塵爆発を除けばこれで人が死ぬことはないが」

霜華は窓から外を見た。穏やかなこちらの世界は殺し合いが日常的に行われることはない。リリアンのように、たまに誰かが殺されたりすることもあるが、基本的には平穏な世界だ。

そして、霧矢は散々人を殺してきた自分でも、こつちの世界に居場所があると言ってくれた。昔、向こうが穏やかだったときにも、こつちの世界にちよくちよく遊びに来ていた。風華へのプレゼントを買ってあげたり、好きなものを買ったりしていた。

もっと早くこつちの世界に来るべきだった。そうすれば、自分が手にかけてきた相手の数は、少しは減っていただろう。

そう考えると後悔が自分を襲う。殺戮は避けることができたので

はないかと。

「どうした。気になることもあったのか？」

文香が心配そうな声で霜華の顔を見る。彼女は霜華が多くの人を手にかけてきたということを知らない。知っているのは霧矢・有島・風華だけだ。

「何でもない。ちょっと疲れてるだけだから」

霜華の言葉に、文香はふむ、とうなずくとそれ以上は深く追及しなかった。

外の通りを見ると、町の外れにあるスキー場へと向かうタクシーや徒歩のスキー客が目立つ。この商店街はもとも温泉街で、山もあるので冬ならばスキー客でそれなりににぎわう。そのかわり、春・夏・秋はまさに田舎町そのものとなる。

ここ、浦沼とはそういう町らしい。山に囲まれ、田んぼが町を占める典型的な田舎町だ。

「今日はスキー日和だが、この日差しの強さだ。雪目になる人が出るかもしれない」

文香も観光客を眺めながらつぶやく。純白の雪に反射された紫外線に目を焼かれるとかなり痛む。すぐに治るが治るまでが相当痛い。霧矢は前に話していた。霜華は半雪女であるが、スキーの経験はない。むしろ、雪の上でも土の上と同じくらいのスピードで走れるので必要もなかったことが多い。

「晴代ってスキーが大好きなんだよね。この前、スキーウェアでうちに飛び込んできた」

「そうだな。中学校時代はスキーで晴代の右に出る者はいないとも言われたくらいだが…」

文香の話では、ゲレンデでの晴代の性能は異常らしく、空中一回転のモーグルも軽くやってのけるそうだ。

「もはや、晴代はスキー中毒と言ってもいい。週に必ず一回は滑ら

ないと禁断症状を起こす。リフトの駆動音を聞くとうずうずしてくるらしいな」

クスリと笑って文香は冗談を言った。居間の机の上に置いてある定期券のパスケースのようなものをヒョイとつまみ上げた。

「やはりな。市内共通のシーズン券まで買っている」

魚沢市内スキー場シーズン共通リフト券と書かれたカードの名前欄には上川晴代という署名がある。魚沢市は浦沼町や浦沼よりさらにド田舎なその他の村との合併を繰り返した結果、面積だけはだだっ広く、人口密度だけが極端に小さくなってしまった市である。

「それにしても、浦高の冬課題の量は割と多いのに、スキーなどしている暇はあるのかどうか」

「え……？」

「私ならば、今年中に終わらせられるが、先週の晴代の様子を見たのならわかるだろう。彼女には毎日かなりの時間を費やしても終わらせられるかどうか……」

文香はため息をつく。文香は学年で片手に入る秀才だが、晴代は下から数えた方が早い。ちなみに、霧矢は平均より少しだけ上である。

「まあ、何とかなるんじゃないのかなあ」

「そう祈りたいが、毎回、長期の休みの終わりごろになると私が呼び出されるのはお約束となっている。中一のころからずっとだ」

苦々しい顔を浮かべて、文香はリフト券を机の上に戻した。霜華は苦笑いする。

「それにしても、晴代は趣味と勉強の比率を考え直した方がいいと私は思う。私としては三対七くらいが良いと思うのだが、今の晴代は九対一だからな」

「スキーだけにそんなに費やしているの？」

文香は言葉に詰まり黙っている。霜華としてはなぜ黙っているのかは理解できなかった。

「まあ、スキーだけじゃなくて、他にもまあいろいろな趣味がある

と、そういうことだ」

それ以上は聞かないでくれ、と文香は遮った。

「お待たせ。片付け終わったよ！」

晴代がドタドタと騒がしく二階から降りてきた。

「やっと終わったか。だから、あれほどこちんと部屋は片付けておけと言っていたものを」

「説教はいいから。さ、上がって、上がって」

文香の小言をさらりと流し、晴代はうきうきと二人を引き連れ階段を上って行った。

クリスマス前の平穏と不穏 2

「ありがとうございます。お大事に」

霧矢は店から出ていく客に頭を下げた。時計を見るとそろそろ昼時だ。霜華を呼び戻そうと思ったが、おそらく、昼は晴代の家で食べてくるだろう。無理に呼び戻す必要もないと考えた。空腹は大したことなかったが、昨日の疲れで体力はかなり消耗していた。

霧矢はカウンターに置いた冬休みの宿題を睨みつける。自分でリストを作ったが、一日五時間以上やらなければ、確実に終わらない量だ。

(……晴代のやつ、大丈夫なのか?)

文香と同じ懸念を浮かべながら、霧矢は英語の読解課題を開く。英字新聞の記事を全て訳して来いというふざけた内容だ。一通り眺めてみると、経済がらみの内容のようだった。

「これはいじめだな……」

独り言をつぶやいていると、店の扉が開く。無精ひげを生やした男が入ってきた。

「いらつしやいま……せ……?」

「おはよう。三条……」

「せ……先生……どうしたんです。こんなところに……」

この男は松原陽介といって、県立浦沼高校の生徒会顧問で霧矢と晴代のクラスの数学を担当する教師だ。教え方や人柄は悪くないのだが、だらしのない上に、年の割にはいろいろと親父くさいということとで、生徒からの評判は良い意味でありよろしくない。

「昨日からどうも調子が悪くて、隣で見てもらったんだが……インフルエンザだと言われた」

霧矢は身構える。普通の流行性感冒は少し前にもう引いたので免疫ができているが、残念なことに、今年はインフルエンザの予防注射をしていない。

しかも、あり得ないことに、松原先生はマスクも何もせずに薬局の中で咳をしまくっている。霧矢は顔をそむけながら、処方箋を受け取り、母親を呼んだ。

「インフルエンザはわかりますけど、何か先生酒臭いですよ」

「昨日、休みに入ってたことで、先生たちで飲み会だった。飲み過ぎてまだ頭痛がする。しばらくの不養生がたたったみたいだな」

霧矢たちがリリアンとの死闘を繰り広げていたちようど同じ時刻に、先生たちはのんきに酒盛りをしていたらしい。寒空の中、へべれけになって帰っている途中に、インフルエンザが発症したということだろう。

彼はこの商店街の近くにあるアパートに住んでいるとだけ聞いたことがある。そして、この商店街のとある割烹は、浦沼高校御用達となっていて、地域の経済に先生たちは貢献している。

「自業自得ですよ。体調が悪いなら飲み会なんて行かなきゃいいんです。それと咳き込むならまわりにうつさないためにも、きちんとマスクをしてください」

さりげなく、霧矢はカウンターにマスクの箱を置く。商売上手め、とつぶやくと財布から小銭を出した。

「毎度あり。あと、アルコールが抜ける前に薬は飲まないでください。副作用が出ますから」

箱を開けてマスクをつけていると、理津子が店の方に出てくる。

「あらあら、先生。息子がお世話になっています」

「いえいえ、こちらこそ」

霧矢が出した薬を理津子はきちんと処方箋通りか確認する。霧矢は確認を受けて、薬を袋に入れていく。

理津子が松原に飲み方を説明するのを横目で見ながら、霧矢は換気扇のスイッチを入れる。先ほどの飛沫でうつされてしまったのは、クリスマスが台無しになってしまう。備え付けてある消毒液を両手に念入りにこすりこんだ。

「ところで、うちの子、無事、薬学部に行けるのでしょうか？」

霧矢の動きが止まる。成績のことを突かれると、霧矢としては返しようがない。

「数学に限って言えば、今のところ、大学を選ばなければ可能でしょうね。でも、まだ一年生ですし、これからの努力次第というところでしょう」

かすれた声で、そこそこまじな評価をもらった。霧矢は息を吐いた。

「三年生は、センター試験直前で忙しくなってますし、霧矢君も三年生並とは言いませんが、そこそこ頑張ってもらいたいものです」

「……頑張る……か……」

「そうだ。頑張れ。すべてはお前の努力次第だ」

グーサインをすると、薬代を支払って松原は出て行った。

「ありがとうございます。お大事に」

理津子は再び、家の方に戻っていく。霧矢はカウンターに座り、英語の課題に戻った。

(……冬休みか……こんなに宿題出されて休みとかふざけた話だな)

高校生とは割としんどいものだ。浦沼高校はどちらかというと進学校で課題がやたらと多い。中学校の時も友達はみんな敬遠して、隣の高校に行ってしまった。浮かれて町で遊んでいる高校生を見ると、一抹の羨望があったりするのだが、店の跡を継ぐためには、大学に行かなければならない。

もともと、この薬局は、もう二人とも亡くなっているが、霧矢の父方の祖父母が始めたものだ。祖父は先代の隣の診療所の先生と旧知の仲だったらしく、一緒になって診療所と処方薬局を始めたそうだ。霧矢の父親は二人兄弟の弟で、兄は跡を継がずに家を飛び出してしまい、完全に絶縁状態となっている。父親も大学の薬学部に行ったのはいいのだが、薬剤師になるよりも創薬の研究の方が好きになってしまい、店を継ぐのを拒否した。結局、今や薬学部の准教授

で、現在、海外の大学で研究している。

父はそれで危うく勘当されかけたが、父親は祖父母に妥協案を提示した。

実は父、淳史は大学時代にある女性と付き合っていた。彼女も同じ薬学部だったが、研究職ではなく、薬剤師を目指していた。そして大学院を修了すると、二人は結婚した。つまり、理津子を跡継ぎにし、自分は大学での研究を続けるということを提示した。

祖父母も目的は後継者だったので、その案を受け入れ、結局、今のように理津子が薬局を仕切っている。そして、息子である霧矢は店の手伝いをしている、というわけだ。

(……しかし、何というか……いい天気だな……)

外を眺めれば、穏やかな日差しが路面の雪で反射され、キラキラと輝いている。しかし、週間予報によれば、この天気は長くは続かないらしい。明日からまた西高東低となり、日本海側は荒れてきて大雪のクリスマス・イブになるらしい。

(……まあ、こんな田舎じゃ、クリスマスつっても大したことないしな……)

いい天気だというのに、表通りの人気はまるでない。もつとも霧矢の家とスキー場は駅前通りをはさんで反対の位置にあるので、こちらに観光客は来ない。

時計を見ると、隣の診療所が閉まる時間だった。霧矢は課題のノートを閉じて家に戻る。

「霧矢。結局、冬休みの宿題ってどれくらいなの？」

「聞かないでくれ。さっき嫌な気分になったから」

二人で昼食をとりながら、霧矢はこたつ上の板とにらめっこする。霧矢の夏休みは地獄だった。しかし、期間が長かった分、何とか終わらせることができた。しかし、この休みは短く、課題の量は夏休みと大差ない。

ふと思いついて、携帯電話を取り出し、西村にメールをする。

お前、課題終わると思う？

ふう、と息を吐いて、霧矢は昼食に箸をつける。まあ、課題は多いとはいえ、冬休みは冬休みだ。楽しんでいこう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4900z/>

Absolute Zero 2nd

2011年12月21日10時46分発行